

公開セミナー報告 『語り継ぐ足尾』

～苦境の中で生活する人々がいた、ということを知ってほしい～

匂坂宏枝・高橋若菜

セミナー開催の趣旨説明：高橋若菜

足尾といえば、みなさまが真っ先に思い浮かべるのは、田中正造ではないでしょうか。足尾からの鉱毒被害に苦しむ渡良瀬川下流域を巡り正造が天皇へ直訴を試みたのは1901年のことでした。ところが、足尾銅山で、産銅量・精銅量ともに最も多かったのは、明治、大正、昭和初期の終戦直前までです。渡良瀬川下流域は、正造の死後も受苦を受け続けたのです。

では上流にある足尾はどうでしょうか。足尾は銅山によって人口も増加しました。古河市兵衛は学校や公共サービスを提供し、町に繁栄をもたらし、慕われていました。古河あってこそ足尾は、強固な企業城下町となりました。

その裏で、足尾でも、環境被害が起きていました。例えば、採鉱に伴い大量の材木伐採があり生態系破壊をもたらしました。採掘では粉塵によるじん肺が発症し、選鉱では排石処理により有害廃棄物が発生しました。製錬では亜硫酸ガスが発生し、農業被害などをもたらした松木村をはじめ廃村となった村もあります。その状態のまま、採鉱・精銅は明治、大正、昭和と全盛期を迎え、戦争末期に少し落ち込みます。この時期には、朝鮮人が強制連行され、外国人・中国人捕虜の多くが命を落とし、過酷な人権侵害がありました。戦後に産銅・精銅ともに少し持ち直した頃、おそらく初めて有効な環境技術が入り、1973年に閉山し、精錬は1990年代まで続きました。この時期から足尾では森林に緑を取り戻す植樹活動が盛んになり、レジリエンスが始まりました。有害廃棄物、排水処理など一連の公害防止対策も行われていますが、負の遺産に向き合

うには今後も膨大な資金がかかるでしょう。

このような受益と受苦の社会的ジレンマの構造は、足尾銅山鉱毒事件以降、水俣や福島原発震災などに継続しているのではないのでしょうか。だからこそ足尾の100年以上にわたる光と影、レジリエンスの歴史を継承していくことは、重要です。

そのような拠点が足尾にはあります。足尾銅山観光や環境学習センター、足尾に緑を育てる会や国土交通省による植樹活動などです。しかし、足尾歴史館がNPO法人から古河機械金属(株)へ移管がされたように、コモンメモリーを残す場所も、時とともに移行していきます。松木村や朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑などの遺跡はひっそりと存在し、それを語る方がいなければ、人の目に触れることはありません。同じ問題は渡良瀬流域でもあります。

ドイツのワイツェッカーは、「過去に眼を閉ざす者は現在にも盲目となる」と言いました。メルケル首相もアウシュビッツ強制収容所を訪問し、「私たち全員が責任を持っています。その責任の中には、過去を記憶することも含まれています」と述べています。足尾の世界遺産登録をめざす日光市は「足尾銅山の建物群は、単なる近代産業の記念物ではない。公害反対運動の中心となった渡良瀬川下流域の遺跡とともに、その景観は20世紀の縮図であり、我々人類が21世紀になすべきことを示している現在進行形の遺産なのである。」と述べています。

宇都宮大学では、図書館や多文化公共圏センターで、故小松裕先生の関連資料をお預かりし、セミナーを行うなど歴史の継承に努めてきました。

本セミナーもその流れのもとで開催します。足尾の最高学府の足尾高校で社会科を35年教え、50年住み、多面的な歴史の継承を志してこられた生沼勤先生の語りを、本学の社会人博士後期課程学生匂坂宏枝さんが先生のご自宅から中継します。谷中に遺跡を残す会会長で本学名誉教授の高際澄雄先生にはコメントをいただきます。どうぞよろしくお願ひします。

報告：生沼勤氏との対談～匂坂宏枝（解説）

○『語り継ぐ足尾』紹介

この度、『語り継ぐ足尾～生沼勤氏の語りとともに～』という冊子を制作しました（写真1）。

2013年度～2019年度に、宇都宮大学国際学部高橋若菜教授による環境に関する授業の一環で、足尾鉍毒事件の構造を学ぶフィールドスタディが実施されました。その際、足尾のガイドをされた生沼勤先生のお話が本冊子の基になっています。

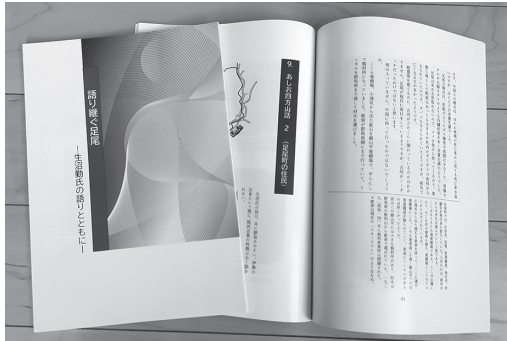


写真1. 『語り継ぐ足尾～生沼勤氏の語りとともに～』

○生沼氏の経歴

- ・ 1941（昭和16）年横浜生まれ。父親の仕事の都合で幼少期の2、3年ほどを中国で過ごしました。
- ・ 小学校から高校は伊勢で暮らしました。
- ・ 大学卒業後は、栃木県立足尾高校の教員となり、赴任して1年後、定時制担任となりました。（担当：社会科）
- ・ 定年退職後に「足尾の環境と歴史を考える会」を立ち上げるなど、足尾の歴史に関心を持ち続けていらっしゃいます（写真2）。



写真2. ガイドをする生沼氏（2018年5月26日撮影）

○目次

目次はフィールドスタディで足尾を巡った順に構成しました。

『語り継ぐ足尾』目次

1. 足尾町の堆積場（足尾歴史館）
2. 足尾銅山観光
3. あしお四方山話 1（中才へ向かう道中）
4. 中才浄水場
5. 中才から小滝へ
6. 朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑
7. 小滝の里
8. 中国人殉難烈士慰霊塔
9. あしお四方山話 2（足尾町の住民）
10. あしお四方山話 3（製錬所）
11. 松木村

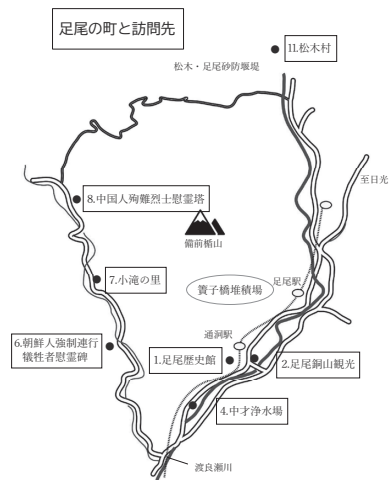


図1. 冊子掲載の地図

○生沼氏の語りの特徴

生沼氏は、栃木県外から足尾に移り住んで約50年間、そのうち約35年間を高校教諭として勤めました。この間、足尾の歴史に興味を持ち、資料を集めたり調査をしたりしています。足尾に生まれ育った者にとっては負の歴史ともいえる部分についても、生沼氏は目を背けることなく調べ、語ることができます。その上、50年間の生活者としての視点から、今の足尾についても語ることができるのです。

フィールドスタディでのガイドを文字にしてみると、「朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑」と「松木村」のページに多くの紙面が割かれています。この理由をうかがったところ、生沼氏自身の幼少期からの経験と興味に関わっていたのです。それは、「権力」や「差別」の中に生きる弱者へのあたたかな視線でした。そうして、本セミナーの「苦境の中で生活する人々がいた、ということを知ってほしい」へとつながるのです。

それでは、授業時の動画を交えながら、「朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑」と「松木村」での生沼氏のガイドを見ていきましょう。

○6. 朝鮮人強制連行犠牲者慰霊碑

①朝鮮人強制連行の歴史的背景

- ・太平洋戦争時、日本人男性の兵への動員によって労働力不足となる。
- ・1939（昭和14年）年～1945（昭和20）年朝鮮人が官による募集、斡旋、徴用により日本への労働力として調達された。しかし、強制連行が多かった。
- ・足尾銅山には、2416人が連行されたとなっている。
- ・銅山労働では、比較的技能を問われない車夫に重点的に配置された。
- ・戦後、会社から慰労金が支払われることになったが、その前にほとんどの朝鮮人が帰国していた。給料もほとんど未払いになっている。

②生沼氏の語り

「朝鮮人の問題はしっかりと解決されるべきではないでしょうか。この慰霊碑も、日の当たらないこの場所でいいのかわかりませんが、もっと立派なものが何年か後に建てられればよいと思います。しかし、日韓条約や北朝鮮との問題もあり進んでいません。毎年慰霊祭は行われています。碑には、<足尾で犠牲になった同胞たちの遺恨は忘れない>ということが書かれているそうです。」（『語り継ぐ足尾』29-30頁）



写真3. 慰霊碑（2019年12月13日撮影）

○11. 松木村

①松木村の略歴

- ・江戸時代1853（嘉永6）年、人口は37戸198人という記録がある。明治時代1892（明治25）年は267人。自給自足ができる、ある程度豊かな山村だった。
- ・1885（明治18）年頃から煙害が始まる。
- ・1900（明治33）年農作物が全滅する被害が出た。田中正造の助けを借りることになった。
- ・古河鉱業と示談。1902（明治35）年廃村（数名が残る）。

②生沼氏の語り

「そこで40戸、260人が食べるのに不目由しない

生活をおくることができたのは、農作物の収穫、養蚕の現金収入、山のもの（薪や山菜きのこなど）、星野金次郎さんなどの猟師としての生活があったのでしょう。その村が、煙害によって村を追われる歴史。文明とは何か。近代とは何か。富国強兵、殖産興業とは何か。考えさせられます。」

（『語り継ぐ足尾』73頁 補足説明より）



写真4. 松木村跡に残る墓碑（2019年12月13日撮影）

○解説：現地を訪れてほしい

生沼氏は資料を基にして足尾の歴史を語り、また50年間の足尾での生活を基に今の足尾を伝えています。これを聞いた者は、足尾にも苦境の中で生活した人たちがいたことを知ります。足尾の歴史を活かすために、負の部分でさえも語り継いでいかねばなりません。

しかし、足尾は時を止めることなく変化しています。銅山に関わる施設は朽ちたり取り壊されたりしています。亜硫酸ガスではげ山になった山々には、植樹のおかげで緑が増えてきています。山の保水力を回復するという点では、下流域の方々にとっても喜ばしいことです。しかしその景色は、亜硫酸ガスの被害で廃村となった村があった、ということも忘れさせるかもしれません。

足尾銅山は閉山となって以来、過疎化、高齢化が進んでいます。頼りにしている観光も徐々に減り、益々縮小していくのでしょうか。けれども、環境問題はこの先も半永久的に残っていくのです。まるで、足

尾の行く道は、日本が行く道の一步先を行っているかのようです。

私たちは足尾銅山に関わるだけでなく、今の足尾からも多くのことを学ぶ必要があります。この冊子を手にとって是非足尾を訪れてみてください。ありのままの足尾を見ることで私たちの将来も見えてくるはずです。

○生沼勤氏より補足（対談より）

最近、中才浄水場が塀で囲まれてしまいました。銅山の負の歴史的産物ですが、完全とは言えないものの鉍毒予防に役立ったことは確かです。古河は企業としてその役割を、説明板を立てるなどして説明すべきだと思っています。

古河は小学校から実業学校までを作り、当初から高校に定時制を置いていました。定時制の生徒は銅山で働いていますので、その役割というのは大きかったはずです。

私自身は、高校の定時制の授業でやれるだけのことはやったと思っていますが、生徒たちが働く職場見学というのを学校ではやりませんでした。本当に定時制の生徒のことを理解していたのか、と思うこともあります。こういう教育の面からも、足尾銅山を見ていく必要があるでしょう。

高際澄雄名誉教授のコメント

未来への教訓というのは、この谷中村も同じです。田中正造は1904（明治37）年に谷中村の住民となり、それから10年間、生涯を終えるまで戦いました。この戦いで正造が、自然が大事だ、と言ったことは最も重要です。当時、渡良瀬川は今よりも西を流れていました。北には赤麻沼、石川沼、東赤麻沼などがあり川魚が湧くように採れたということです。これを掘削し渡良瀬川を流し込んだら、全て消えてしまうから反対しろと、赤麻だけではなく石川、帯刀とかに呼びかけました。しかし、実際にそれが起こってしまったのです。

ですから、今の渡良瀬遊水地は正造が言った

通り、自然が破壊された後なのです。しかし、周りの環境と比べると渡良瀬遊水地は素晴らしいのです。2010年7月にラムサール条約に登録されました。これは現在の小山市長の浅野正富先生が渡良瀬遊水池をラムサール条約に登録する会を作り、実現しました。浅野先生たちの努力で本当に素晴らしいものとなり、コウノトリが生活する場となっています(写真5)。今は一面ヨシ原ですが、その中に沼と川がほぼ残っています。そういうところにコウノトリが来ます。私の妻と妹が行った時、八羽いたそうです。八羽見られるのは、稀なことらしいです。それから今は少なくなりましたが、絶滅危惧種のチュウビ(タカの仲間)が飛んでいます。城沼にはオオハクチョウもいます(写真6)。ヨシ原は、3か所調整池があり、第1調整池からは筑波山が見えます。

田中正造は渡良瀬遊水地には反対でしたが、今の遊水地を見たなら賛成してくれるかなと、私は思っています。それほど自然の大切さというものを正造は常々言っていました。

それからもう1つ大切なことは、正造は富国強兵に強く反対しました。このままいくと日本が減びてしまうかもしれないぐらいの危機感を持っていました。私はその結果が日中戦争であり、そして太平洋戦争であったと思っています。正造は日本がひどい状態になると言って亡くなりました。やはり未来への教訓が足尾にはある、それを私たちは伝えていきたいのです。同時に、富国強兵殖産興業に対する負の問題として伝えなければなりません。



写真5. 飛ぶコウノトリ
(2021年12月5日、高際名誉教授撮影)



写真6. 館林城沼から飛び立つオオハクチョウ
(2021年12月5日、高際名誉教授撮影)

フロア・ディスカッション

質問：足尾銅山の負の歴史や渡良瀬遊水地の歴史や意義について栃木県内の中学、高校で副読本や資料などが出されていますか？

生沼氏：足尾の小中学校でも郷土史はやっていると思いますが教育内容や副読本についてはわかりません。

質問：足尾銅山や田中正造の問題を授業で取り上げるときの難しさや課題はありましたか？

生沼氏：私自身は、抵抗はありませんでした。現代の問題と郷土の問題を結びつけた社会科授業をきちんとやらなかったことを本当に反省しています。私自身の知識を生徒に伝えるべきでした。

以前、小中学校で、田中正造は敵であると言った生徒がいたそうです。町民の中にもそういう意識はありましたが、現在は、そういう意識はなくなっていると思います。

質問：山に緑を取り戻す営みと古河金属との関係は？

生沼氏：古河は、もう時効であるといって、あまり費用は出していません。数百万円を寄贈して終わりだったという話をよく聞きます。一方で、古河は社宅を取り壊した跡に桜の木を植えています。桜の見ごろになると、古河も気を使っているのだと感じることはあります。

質問：中国人の労働者はどのように日本に来たのでしょうか？

生沼氏：中国人は捕虜が多く、朝鮮人は強制連行が多いです。家族持ちの朝鮮人もいて社宅に住み、小学生は学校へ通っていました。朝鮮人家族の生活に関する手記が残されていないのは残念です。

銅山の鉱夫は虐げられた労働者だと小説などで強調されます。私は、鉱山労働者としての楽しみや豊かさはあったはずだと思います。社宅は電気も安く、三養会（生協のような店舗）では、金がなくても給料日に支払うことで何でも買えました。そういう鉱山町の住みやすさについても考える必要があると思います。

質問：群馬県では田中正造の活躍を学校で学んでいるようですが、詳細をご存知ですか？

高際氏：田中正造記念館というのがあります。群馬県館林市付近も鉱毒被害がひどかったのです。だから田中正造の活躍も、被害が深刻だったところで知られています。以前記念館で、小学生の副読本を集めて展示したことがあります。栃木県の佐野市、栃木市、小山市は、小学校3年生のときに渡良瀬遊水地に関連して、足尾鉱毒事件や田中正造がどのような活動をしたのかということをお教えています。子供達が大きくなって覚えているかはわかりませんが、この時期に学んでいます。とくに館林市ではよく学ばれていると感じています。

鉱毒は今でも被害があります。渡良瀬川の河川敷の跡では稲が育ちません。それから渡良瀬遊水地でボーリング調査をするときは、鉱毒が埋まっているところは掘削しないようにしています。田中正造は生きていた時にどのぐらいの人が犠牲になったか調べて、1064人という数を出しています。とくに妊産婦が

犠牲になりました。正造はその人たちのことを非命の死者と言います。天命を全うできなかった人ということです。これは非常に適切な呼び方だと思います。

質問：足尾銅山を起源とする汚染や健康被害の現状、放置状況に関する情報はありますか？

生沼氏：私が足尾高校に赴任した昭和39年にもガスは出ていました。昭和40年代、私は定時制勤務のため、朝は外にあまり出なかったのですが、家内が子どもを心配してガスのことをこぼしていたのを覚えています。朝方は酷かったのでしょう。ガスが出ると庭の草木がやられるので、新聞紙を被せて防いだという話もよく聞きました。とくに北部地区は酷かったようです。

昭和44年にある団体が行ったアンケートでも煙害の様子がよくわかります。製錬所も設備改善には努力したようです。平成元年、製錬所が廃止され亜硫酸ガスの問題で悩むことは完全になくなりました。

質問：慰霊碑の大きさの違いはどのような理由で生じたのでしょうか？

生沼氏：日中の関係、朝鮮との関係、それが尾を引いていると思います。中国人の慰霊塔ができたのは日中の国交が回復した時です。古河が協力したかはわかりませんが、町は大変協力しました。

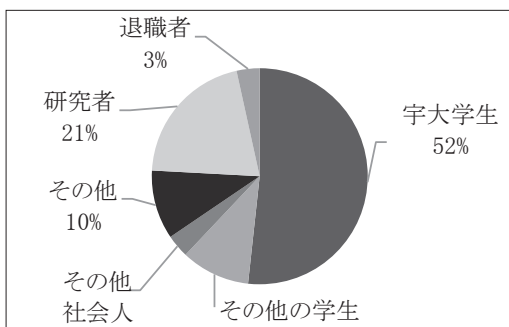
朝鮮人への差別意識と中国人に対する差別意識は異なります。現在、慰霊碑の問題は、拉致問題等に関連する日本と北朝鮮との関係が影響していると思います。慰霊碑は暗がりの寺の跡にあり、あらためてその大きさを見ると、中国人の慰霊塔との差をつくづく感じます。

セミナー後のアンケート結果

公開セミナーには、授業受講生18名、Googleフォームからの申込者76名、合計94名の参加がありました。セミナー後の事後アンケートには、参加者94名のうち29名から回答をいただきました。以下はその概略です。

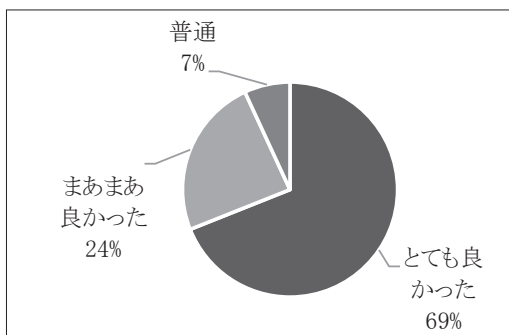
Q. ご所属

宇大学生	15人
その他の学生	3人
その他社会人	1人
その他	3人
研究者	6人
退職者	1人
合計	29人



- ・大学HPや学会のメーリングリストで広報したため、研究者や学外者からも回答をいただきました。

Q. 本日のシンポジウムはいかがでしたか。



- ・良くなかったという回答はなく、9割以上の回答者から好評をいただいた。

Q. 本日のセミナーについて、ご意見・ご感想など、ご自由にご記入ください。(抜粋)

<足尾の歴史を知る>

- ・足尾銅山鉱毒事件については、中学の授業でしか知ることが無かったので、足尾の歴史や現状、語り継ぐことの困難などを学ぶ事ができました。
- ・100年以上続く事件の歴史をどのように伝えるのか、難しい課題と感じました。
- ・足尾の高齢化や足尾鉱毒についての歴史が見えにくくなっているという課題は知ろうと思わないと情報が得られないということも問題だと思いました。

<負の歴史を残すこと>

- ・(朝鮮人強制連行犠牲者について) 立場の弱かった彼らのことはあまり公になりにくい中、彼らの話を語ることは事実を認識する上で重要な手段だったはずだ。
- ・日本は自分たちが行った負の面についてあまり公言しないイメージがあるので、実際に現地の人のお話を伺えたのはとても貴重な経験だと思います。
- ・過去の負の歴史の残り方次第で、歴史そのものの印象が変わること、薄れること、複雑さを増すことがあると改めて感じた。

<足尾から未来へ>

- ・足尾鉱毒事件と同様に日本中のこうした環境被害についてこれからの肥大化する産業社会を生きていく者として他人事ではなく自分事として問題に向き合っていかなければいけないと感じました。
- ・足尾をよく知ることで、それが未来への教訓になるという言葉は、足尾だけでなく様々な問題をみる時にも言えることであり、私たちが地球で生きていく中で非常に重要な考え方だと思いました。

公開セミナー「語り継ぐ足尾」

～苦境の中で生活する人々がいた、ということを知ってほしい～

日時：2021年12月8日（水）12：40～14：10

足尾銅山が日本一の銅産出量を誇り、町が「小東京」といわれるほど賑やかであった明治時代、下流の渡良瀬川流域では鉱毒被害に苦しんでいました。この時期、足尾銅山の足元でも、亜硫酸ガスの煙害によって廃村となった松木村がありました。また戦時期には、強制連行された朝鮮人、捕虜となった中国人が銅山で働き命を落としていました。足尾においても、銅山の盛隆と裏腹に、苦境の中で生活する人々がいたのです。本セミナーでは、今残さないと消えてしまう足尾の歴史を、足尾高等学校の社会科の元教諭が語り継ぎます。歴史から私たちは何を学べるか、ともに考えましょう。

あいさつ 中村真 宇都宮大学国際学部 学部長／教授

生沼勤 語り

栃木県立足尾高等学校
元教諭（社会科）
足尾町在住



高際澄雄 コメント

宇都宮大学国際学部
名誉教授
谷中村の遺跡を守る会
会長



匂坂宏枝 解説

宇都宮大学国際学部
博士後期課程在学
多文化公共圏センター
研究員



高橋若菜 司会

宇都宮大学国際学部
教授

会場：ZOOM ミーティングルーム

参加費：無料

参加申込：右のQRコードもしくは以下のアドレスより事前登録ください。

登録後、ミーティング参加に関する情報の確認メールが届きます。

https://us02web.zoom.us/join/register/tZYqc-6grzkoHNEKX67r0bn_Vrd22C6avnpl



企画運営：地球環境政策論・環境と国際協力演習 合同授業

共催：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター・福島原発震災に関する研究フォーラム

問合せ：〒321-8505 宇都宮市峰町 350 宇都宮大学国際学部附属 多文化公共圏センター